

実践と理論のあいだに(3)

公式理論と内潜理論

田中 平八

これまで触れませんでした、内潜理論 (implicit theory)、公式理論 (formal theory) という用語には出典があります。九七年に発刊された J・D・ウィルキンソンと E・A・キャンベルという人たちの編著書のなかに、ここまで私が言及してきたよりもっと制限され

た内容としてですが、ほんの少しだけ出てくるのを発見しました。「暗黙のパーソナリティ理論」の発展版と読みとれますが、学術的にはその意味がさうとうちがうようなので、区別するため「内潜理論」という訳をあててみました。お二人は、イギリスの大学でカウ

ンセリング心理学、臨床心理学を教育指導しながら、それぞれカウンセリング、心理療法を実践されている女性の方のようです。

ちなみに、同書は、カウンセラーやセラピストを目指す人たちといえども、広範な心理学の知識を身につけ、実践活動との共働関係 (surgery) を意識していかなければならないという強い意図で編まれたと書かれております。公然と“バブル”と決めつける向きも少なくない、わが国心理学の臨床ブームの現況がなんとか健全なたちで定着することを願う私たちとしても、こうした趣旨の本が、イギリスの、それも“臨床”側から出版された点においてに賛意を示すところで、調子にのって仲間を募り翻訳までしてしまいました。『カウンセリング・臨床コースで学ぶべき心理学』という、とても自著にはつけられないタイトルのお厚い本として、来年度中には出版されるはずですので、興味のおありの方はご参照のほどを。

その本の序章に載っている例に、新米のカウンセラーが訓練を受けたばかりの技法にしたがってセッションを重ねてみたものの、効果があがらないと勘違いをし、経験に裏打ちされて自信のもてる自分の人生哲学に頼ってクライエントを支援しようとして、結局ケース全体がぶちこわしとなってしまうという話が使われています。非現実的な設定ではありませんが、このにわかカウンセラーは、とある若いひとりのGP (general practitioner、一般家庭医、英国医療におけるかかりつけ医) が、からだの健康に対する心理的要因の重要性を意識するようになっての実践活動という例話ですので、読んでいて実感がともなわれないわけでもありません。このお医者さんは、“(家庭でも仕事でも) いつでも、問題に対しては、真正面から、立ち向かい、責任をまっとうし、よき問題解決者であること”を誇りとしてきた“という自覚をもつ人物です。熱心に出席した集中カウンセリングコースがヒューマニス

テイックな立場を指向するところ（必然的に来談者中心療法で非指示的アプローチをとることになるでしょう）、その上、お相手の患者というクライエントは、八ヶ月の赤ちゃんをもつ母親で、育児疲れにもとづき夫および家庭生活がぐちゃぐちゃになっている状態。モデルがないことはないにしても、こういう事例はほぼフィクションに近いのですが、それにしても御膳立てがそろい過ぎの感がないではありません。

残念ながら同書は、ここで議論しているような方向には進んでいかないのですが、あえて解釈を加えてみれば、修練を積んできたはずの技法や理論的アプローチが、彼にとって公式理論であり、彼自身の人生指針や経験知や価値観が、内潜理論に相当するということになるでしょう。余談になりますが、論文を書くとき、海外の文献の存在はなかなか大事なところで、個人が提唱しつづけてもなかなか認知されないのが、横文字の引用文献があると一気に付加価値がつくよう

なところがあるのです。読者の方々は、ここまでお読みになられてどう感じられましたか。いいかげんに脱したいおかしな風潮ですが、今回はもともと文献の引用紹介も予定のなかにありましたので、あちらの用語にしたがっておきます。個々人の意識や行動のなかで、意識しているかどうかは定かではないけれども、外顯的 (explicit) な公式理論に対して拮抗する機能をもつという意味で、内潜的な「理論」と称されているのも、採った理由のひとつです。

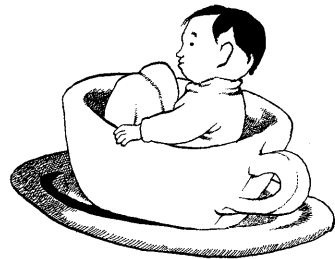
現実の心理相談業務の場面において、あらかじめ約束した五回のセッションの、それも四回目になって突然、一方的にカウンセラーの方から面接方針が変更されるというようなことは、まして養成過程にあるような新人カウンセラーがそういうことをするというようなことは、滅多におきるものではないでしょう。本のお話だと、これに対して裏切られたと感じたクライエントの側から、面接を打ち切る動議が出されて

セッションは終了しますが、一般的には、このようなカウンセラーの「親身な」介入は、クライアント側の絶対的依存を引き出してしまうことが多く、まともな治療関係は成立しなくなることが予想されます。

ふつう、カウンセラーは「非力である」立場の方向に氣力をこめて我慢するよう修練を受けている、まことに地味な存在です。カウンセリングにおいて、どういう形式にしろ自分の「内潜理論」を展開するのはクライアントのほうだけに許されている権利で、カウンセラーは、そのことが発見的に再構築される場を保証し、支援する役割に専念するはずで。

では、カウンセラーにとって内潜理論はどうでもいいものかという議論をしてみたいと思います。何はともあれ、面接場面で前面に押し出すような性質のものではないことだけは確かで、したがって、上述のような事件は論外であります。しかしながら、心理相談なんて仕事は、ひとが溜めこんだ毒を一身に浴びるよう

な目にあうことも多く、しんどいに決まっているのですから、その過程において、内潜理論はカウンセラー自身を内側から支えるという重要な機能を果たしているはずで



す。友人、知人から依頼のカウンセリングであっても、その期待からそれれて、息子が選択した道は進学コースを降りることだったり、配偶者が到達した結論は別の道を歩み始める決心だったりすることはめずらしくはないでしょう。なかなかの覚悟と人生観を維持していく必要があります。

面接の技法のイロハに、確認とか明確化とか呼ばれるものがあって、研修時代は互いにロールプレイをしかうわけですが、こうした言語記録には残らない、内潜理論からの応答も、ちよつとしたあいづちや微笑み

などのかたちで、クライエントに重大な影響をおよぼしているかもしれません。カウンセラーの役目はクライエントのこころを映す鏡であると言われますが、ほかの誰でもない、そのひとがカウンセラーであるという、人間的な存在も重要なことのように、とくに最近考えるようになってきました。

スクールカウンセラーの制度が、調査導入されるようになって、五年か六年になりますか。雇用の形態も処遇も役割も機能も、地域、自治体、学校によって千差万別のように、それでも、友人の苦労話だと心理職からの先遣隊として派遣された先方の校長に、「ルーズソックスの着用をまず何とかしろ」なんて言われながら始めた、第一世代からの努力もあって、それなりに定着しつつあるようです。この期におよんで止めということにはならないでしょうから、まずは、臨床志向の学生さんの行き場がふえてありがたい！ 生徒、教師、養護教諭、管理職、家庭、地域と、どの要素を考

えても、居て困ることはない機能エンジニアントと違います。それにしても、日々の活動を聞くにつけ、彼ら、彼女らに必要とされているのは、腕に覚えあるカウンセリング技法なんかではなくて（使えるような状況にまでなかなかつたどりつかない）、ここで呼ぶところの内潜理論の臨機応変な發揮と、虎の子の公式理論の応用のようです。多少の社交儀礼も含まれているでしょうが、皆さん、学生時代にもっといろいろ勉強しておけばよかったです。

以上、心理カウンセリングの分野に例をとって、技法的な側面の修練はもちろんのこと、ここで内潜理論と呼んだ人間観・世界観・価値観・経験知との内的なダイナミズムが重要かつ大切であるという視点と、個人の意識のなかにおける内潜理論と公式理論の意味と機能をまとめてみました。

もう少し一般的な実践の場面に話を移しましょう。
“ほめて育てよ”という指標があります。ひとを教育

する立場にあるひとにもっとも大切な態度です。鉄棒が苦手の子をなんとかしてあげたいとかねてから考えていた小学校の若い担任は、あるときその子がもうちょっとでとびつけそうになったのでほんの少し手を貸して鉄棒にのぼらせてあげました。達成感と意欲を感じてもらおうと、よくできた旨みんなの前で「ほめました」。ところが、その子は二度と鉄棒をやろうとはしなくなっていました。これは、よく見聞き、体験する出来事です。もちろん、鉄棒をほかのスキルに置き換えてよろしいわけです。子どもの気持ちからしてみると、ほかの子がこの程度できたからといって先生はほめず、手も出さないことをわかっています。その子にとって、先生は自分のことをやっぱりこの程度にみていたんだと思われ知らされる出来事だったので。素直でないなどと言っただけではありません。子ども時代は万能感がいっぱい、だから将来サッカー選手や芸能人になると思っただけです。しかし、一方で能

力不足の自分ということももうすうす感じています。それでも両立できるところが、児童期が生涯でいちばん心理的に安定した時期といわれるゆえんです。出生時からいちいち暗い課題を負わすフロイトですら、この時期を潜伏期と呼んで放っています。だからこそ、ほかの子のようにできないというのはおとな以上に苦痛であるということもあるわけです。これが公式理論から導き出される推測です。ほめるといふ行為は、教育者が単なる強化を与えるための技法ではなくて、自分たちの価値観が試される全存在的な応答、まさに内潜理論の自動と考えるのですが、いかがでしょうか。

内潜理論を育て、公式理論を学ぼうなどと、戦前の修身のような主張をするのは、およそ私の柄ではなく、書いていて冷や汗が出る想いですが、そんなことも言っただけでいられない昨今の、大学の現場からの実感を報告します。さすがに授業崩壊までは身近に聞かないのですが（予兆はみられるような気もしますが）、最

近では、大学の授業もなかなかむずかしい状態になってきていて、たとえば、私が心身の発達の話、つまり発達心理学の公式理論をできるだけかみ砕いて講義をしたと思うてください。これに対して、あなたたち学者に勝手に人生を決められたくないという学生の反論に会う機会が多くなりました。全共闘世代としては、骨のあるやつかと根拠をたずねてみると、ひとに指図されずに自分らしく生きたいとする自己主張の中心は、ものすごく貧弱な常識だったりして愕然となること一度ならずです。理工系を中心に、とくに推薦制度にともなう新入生の学力低下は、授業の成立にかかわるやつかいな課題らしいのですが、それでも技術的に改善する方向も多少は残されているように思います。しかし、親の考えを出ない人間観、偏頗な世界観、ステレオタイプな価値観、乏しい経験知、つまり「理論」にまで達しない脆弱な内潜理論のままとどまっているのを知る機会がふえるにつれこころ寒い気持ちに

なつてきます。現在、起きた起きないと議論が二分される学力低下問題の実質には、こうした側面がからんでいるのではと考えてみたりし始めているところです。

そんなこんなで、大学というところも、知識の伝授と創造性の育成の場なんていつていられる状況ではなくなつてきつあつて、学生たちのこころや行動のケアまで意識的に取り組まなければならない時代となつてきたようです。大学の教員像も、ほど近く、トレバイン姿で走り回る中学の先生みたくになるのではないかと思つたりしています。それにつけても、こころの自覚的形成を育む芽は、幼児教育にあるわけで、とくにエールを送るとともに、議論の共通枠組みを提案してみたい次第です。

(秋田県立大学)